==========
計算姉妹
==========

【登場人物】
長女　エムジー
次女　ネリー
三女　マギー
バルタザール・ド・イトウ・ローラ

暗闇。それぞれ両手でロウソクをもった三姉妹が浮かび上がる
（マギーだけは一冊の本を開いている）

エムジー：20世紀最後の巨匠と謳われた、バルタザール・ド・イトウ・ローラ。92 年間の生涯をひたすら描くことに費やした孤高の芸術家。その偉大な作品と名声が、クライスト・チャーチで、学生たちに数学の講義をし、まだ幼かった私たち姉妹を楽しませ、論理学や幾何学の難問を解いている教師としてのイトウ・ローラに、ほとんど影響をもたらさなかったのは、驚くべきことでしょうか。

ネリー：大学には多くの人々がいましたが、彼らは、この退屈で平凡な個人指導教師が、偉大なバルタザール・ド・イトウ・ローラだとは、夢にも思わなかったでしょう。それはちょうど、イトウ・ローラの熱烈な愛好者でありながら、数学者イトウ・ローラのことは聞いたことがないという人が、現代に何千人もいるのと同じことです。

エムジー：しかし、私たちにとっての彼は偉大な画家でも、偏屈で小難しい大学の講師でもありません。長過ぎる人生のうちでたったひと夏の輝ける時間が、その後のすべてを温め、照らし続ける恒星となりうることを教えてくれた、永遠の恋人なのです。

※以下、舞台中央の黒板に、台詞に沿った数式の板書がされながら進行する

エムジー：先生、わたしはネリーより3倍先生のことが好きです！
ネリー：なに言ってるのエムジー！じゃあ、わたしはその 3 倍、先生のことが好き！
イトウ：では、エムジーが私を好きな気持ちを A、ネリーが私を好きな気持ちを B として考えてみよう。
ネリー：やった！「B」よわたし、わたしの勝ちね
エムジー：馬鹿ね、「C」まで行かなきゃ同じよ。大体「B」ってなによ。
ネリー：ペッ（赤くなる）
イトウ：まずエムジーが私のことを好きな気持ち A は、ネリーが私を好きな気持ち B の3倍なわけだから、
エムジー：3倍よネリー
イトウ：エムジー、
エムジー：はい
イトウ：君が私を好きな気持ち A を、ネリーの気持ち B を使ってあらわすとどうなるかな？
エムジー：はい、A は B の 3 倍なので、A=B×3で A＝3B です。（板書）

イトウ：よろしい（頭をなでる）
エムジー：……。
ネリー：なんだよ、なんだよう。
イトウ：では、ネリー、
ネリー：なんだよう
イトウ：（パシっと平手）こら、なんだ、先生に向かってその口の聞き方は
ネリー：ご、ごめんなさい
イトウ：よろしい。先生はすぐあやまる子が好きだ
ネリー：はい、（嬉しそうに）ごめんなさい！
イトウ：よし（頭をなでる）
ネリー：へへ
エムジー：（顔を背けた）
イトウ：こら、なぜ顔をそむけた
エムジー：あ、はい。…すみませんでした！
イトウ：よろしい
エムジー：あれ、（頭をなでられないので）…
イトウ：ん？
エムジー：ごめんなさい
イトウ：うむ（なでない）
エムジー：あれ、法則…。
イトウ：では、ネリー、同じようにネリーが私のことを好きな気持ちＢを、エムジーの気持ちＡを使ってあらわすと、どうなるかね？
ネリー：はい、Ｂ＝Ａ×３で Ｂ＝3A です。（板書）
イトウ：その通り（頭をなでる）。では、さきほどの Ａ＝3B の式に、この Ｂ＝3A を代入すると、
二人：Ａ＝３×3A＝9A！　Ａ＝9A です
イトウ：そうだ、この等式を解くと、君たちが私を好きな気持ちが数値化されるね。（板書）A はいくつかな？
エムジー：あっ…A は、、、0しかない
ネリー：え！あっ、B も0だ…
イトウ：その通り。つまり、君達は！口では僕のことをやれ3倍だ9倍好きだと言っていながら、本当はゼロ、まったく好きでもなんでもないということがよくわかった
二人：そんな
イトウ：私は悲しい
二人：先生！

※板書が完成すると最終的にこうなる
A=B×３で Ａ＝3B
Ｂ＝Ａ×３で Ｂ＝3A
Ａ＝３×3A＝9A
Ａ＝9A
A=0

B=0

エムジー：妹のネリーは、どちらかというと私よりも少しだけ愉快な顔をしていて、その愉快さの分だけ皆に愉快がられました。わたしは、その愉快さを羨ましく思うこともありましたが、愉快さの足りない顔に生まれた自分のことも気に入っていたし、むしろ、こんなにも役割のバランスが美しく取れた姉妹を創造した、大いなる何かへの敬意とも言うべき気持ちが先に立っていたように思います。

ネリー：先生お願い、もっとお話して！
イトウ：いやいや、今日はもう十分だろう。続きはこの次
ネリー：あら、じゃあ今がその「この次」よ！
イトウ：これはまいった
エムジー：ネリー、先生はお忙しいの、あんまり困らせちゃだめよ
ネリー：だってわたし、もっと先生のお話を聞いていたいんですのもの
イトウ：ハハハ、イヤと言われたことのないその唇から「お願い」と言わると、私もなかなか断りにくいね
ネリー：そうだわ！今から先生のお家に遊びに行ってもいい？　それなら時間を気にせずお話が聞けるわ！
エムジー：だめに決まってるでしょ！
ネリー：どうして？
エムジー：ご迷惑よ
ネリー：えー、だめ？先生？
イトウ：うーん、君みたいな可愛いお客さんだったらいつでも歓迎なんだが、
エムジー：え、
イトウ：あいにく今夜は約束があってね
ネリー：そっかあ…
イトウ：だけど、来週の授業のあとなら時間がある、うちに夕食を食べに来るかい？
ネリー：え！本当に？
イトウ：ああ、約束だ。
ネリー：やったー！
エムジー：そんな、いいんですか？
イトウ：ああ、ネリー1人分、買出しの量が増えるくらいどうってことはないさ
エムジー：1人分
イトウ：ん、なんだエムジー、君も来るかね？
エムジー：え！いや、わたしは…
ネリー：エムジーは無理よね、土曜の夜はピアノの先生がいらっしゃるんだもの
イトウ：そうか、残念だな。上手に調理されたマトンチョップとメレンゲをご馳走したかったんだが
ネリー：素敵！わたし、今からよだれが止まらないわ（ジュルジュル）
イトウ：ハハハ、わたしもだよ（ジュルジュル）
マギー：ケホケホ（と、ずっとやっていたペーパーテストをイトウに提出）
イトウ：お、できたかい？どれ…うーん惜しいなマギー、全問不正解だ
マギー：（無言で受け取り）ケホケホ

ネリー：妹のマギーは、体が弱く、寝たり起きたりの生活が長く続いていましたが、週に一度やってくる先生の授業にだけは、ベッドを抜けて寝巻きを着替え、まるで普通の健康な女の子のようでした。もっとも、病気がちで幼い頃から満足に勉強することができず、おはじきを数えるので精一杯だった彼女にとって、先生の数学は難しすぎました。

エムジー：ですが、わたし達は何も言いません。授業の内容は理解できずとも、この場にいたいのだという、口数少ないこの妹の気持ちは誰にも伝わっていたからです。わたしたち姉妹は 3 人で1人、だから抜け駆けもしなければ、誰か1人を後に置いて行くこともない。喜びも悲しみも等しく 3 人で分け合って生きていく。ずっとそうしてきたし、もちろん、これからもそのつもりでした。…少なくともわたしは。

エムジー：ねえ、ネリー。約束したわよね、わたしたち3人、抜け駆けはしないって。先生はみんなの先生なんだから。
ネリー：わかってるよ。先生はみんなの先生、3人の先生だもんね。
エムジー：1人は3人じゃ割り切れない。いつまでも9が続いて苦しいだけよ

※板書は、台詞に合わせて１÷３＝0.9999…を筆算形式で無限に下に伸ばしていく

```
   0. 333333333
 ____________________
3) 1. 0
      9
      ___
      10
       9
       ___
       10
        9
        ___
        10
         9
         ___
         1
```

ネリー：うん。…でもさ、わたしちょっと考えたんだけど、それってなんかおかしくない？
エムジー：え？
ネリー：だってさ、パンだってケーキだって、1つを3人で分けられるじゃない
エムジー：まあ、そうだけど
ネリー：だからさ、わたし思うんだけど、本当は１も３で割り切れるんじゃないかな？
エムジー：え？
ネリー：割り切れないのは、私たちが難しく考えすぎてるだけで、本当はパンやケーキみたいに、こう、さっさって線さえ引けば、割り切れないことなんてないんじゃないかしら。
エムジー：だめよ、数の悪魔に魅入られるちゃうんだから
ネリー：悪魔！？

エムジー：そう。先生もおっしゃってたでしょ。数学は人間のおもちゃじゃない、なんでもできると思ったら大間違いだ。わたしたちは、ただ、この世界の秘密を少しだけ教えてもらってるだけなんだって。
ネリー：ふーん、わかったわ。本当にそうか、今度先生に聞いてみる
エムジー：ネリー…！

ネリー：その次週の授業のあと、わたしは約束どおり先生のお家に招かれ、夕食をいただきました。エムジーは、「うっかり転んで痛めた」という左手の怪我でピアノの練習がおやすみになったのに、結局、その日熱を出して寝込んでいたマギーのそばについていると言って、先生のお宅には伺いませんでした。

エムジー：…その夜、先生の家で何があったのかは、今もわかっていません。下衆の勘繰りをする一部の研究者の間では様々な憶測が飛び交っており、また彼の少女をモチーフとした作品群の中に、ネリーの面影を探し出すことも難しくはないといいます。しかし、それはちょうど全ての実係数二次方程式が根を持つために想像上の数を必要とするように、不確かな憶測無しには答えの出ない問題だったのです。

※↑エムジーの台詞後半部分

X^2+1 = 0

x^2= -1

x = √(-1)

x = ?

x = ?

x = ?

…以降、x = ？を書き連ねる

（板書しないが、X=虚数 i Imaginary Number を示してる）

エムジーが部屋に入るとネリーとイトウがごく近い距離で何かささやきあっている
凍りつくエムジー

ネリー：いやん、先生。なにかもっと甘いことばを聞かせて
イトウ：そうだな、…砂糖
ネリー：フフフ、すごく甘いわ、あっ（エムジーに気がついて、とっさにイトウから離れた）
イトウ：やあ、おはようエムジー
エムジー：おはよう…ございます
イトウ：どうしたんだい、顔色がすぐれないな
エムジー：そんなことありません
イトウ：だったらいいが。君は妹達想いで二人のことはよく気にかけているが、自分のことをかえりみないところがある。その左手の怪我にしたってそうだ。
ネリー：そうね、エムジー。転んで怪我をするなんて、全然あなたらしくないわ
エムジー：余計なお世話よ！
ネリー：え？
イトウ：どうしたんだエムジー

エムジー：あ、…ごめんなさい。その、怪我が痛くて気が立っていたみたいです
イトウ：そうか、それは大事にしないといかんな。午後のクロッケーの練習は中止にした方がよさそうだ
エムジー：え！
ネリー：わたしもともとあんな玉突き遊び好きじゃなかったわ
イトウ：こらこら、おもしろいんだぞ。玉と棒を使って、最後は中に入れてしまうんだ、ハッハッハ！
エムジー：待ってください！わたし大丈夫です
イトウ：いや、無理をして余計に痛めてしまったらいけない。今回は中止にしよう
エムジー：そんな、わたし楽しみにしていたんです、先生とクロッケーをするのを！
イトウ：わたしも残念だよ、だが今回は中止だ
ネリー：中止よ、中止！
エムジー：そんな、そんな…。
ネリー：中止だ中止だ
エムジー：なによ、そんなに中止が好きならね、中止を中止にすればいいじゃない！
二人：え？
エムジー：……
二人：ハハハハ
イトウ：なかなか面白いことを言うね、エムジー
エムジー：え？
イトウ：しかし、敢えて君の言い方を借りるなら、その、中止の中止を中止しようじゃないか
ネリー：アハハ、先生ったら中止が大好きね
イトウ：フフフ、君ほどじゃないがね
ネリー：え？
イトウ：君ほど「中止よ」「中止よ」ってうるさいわけじゃないからな（意味深に）(チューしよ…に聞こえる)
ネリー：え、あ…も、せんせい！（なんか、イチャイチャ）
イトウ：アハハ、さ、エムジー気を落とさないで。人生は長いんだ。怪我が治ればクロッケーなんていつだってできる。天気はいいんだ、庭に出てお茶にしよう！
エムジー：でも、先生！この手が治る頃には、先生は大学に戻られてしまいます！
イトウ：ん、そうかもしれないな。しかし、君には可愛い妹が二人もいるんだ。姉妹で仲良く玉突きをしたらいい
ネリー：先生、わたしボートに乗りたいわ
イトウ：わかった、じゃあ先に行って準備してこよう（部屋を出て行く）
エムジー：…だったら、この手はもう治らないのと一緒です
ネリー：どうしたのエムジー？　わたしたちもお茶の準備に行きましょ
エムジー：行かない
ネリー：え？
エムジー：行かないって言ってるの！
ネリー：ふーん、じゃあ先生にそう言っとくね（去っていく）
エムジー：先生…

ネリー：のちに大変有名になった「黄金の午後」というのは、一般的にこの、夏の授業が始まって間もない、62 年の 7 月 4 日を指すと言われてます。雲一つない青空、そして鏡のような水面。人生のひときわ明るいきらめきのような船

遊びの午後。やがて山間に沈む太陽から、すばらしい色彩が投げ掛けられ、湿った砂の上できらめいている光と色に反射していました。この神秘的な情景は、後世の人々、そしてわたしにとっても、永遠に忘れることのできない、バルタザール・ド・イトウ・ローラの中期を代表するかの作品のモチーフになったと言われています。

エムジー：ですが、わたしの見解は少し異なります

ネリー：え？

エムジー：モデル本人が、こうして違うと言っているのに、誰が言い出したのかわからない 7 月 4 日などという具体的な日付が定説として流布されてしまう、この業界の慣習と言いますか、それは不思議の一言に尽きます。

ネリー：……。

エムジー：それは、先生が大学に戻られてしまう一週前のことです。授業が終わったあと、わたしはこの場所に先生を呼びとめて、それまでの生涯で一番の勇気を振り絞り、生まれて初めての素直な気持ちを言葉にして、先生に伝えたのです。先生はわたしの告白を聞いて、何かを考えるような顔をした後、わたしのことをまっすぐに見据えていました、私の心臓は早鐘のようになり、そして…言い知れない沈黙が流れました。

見つめあう二人と言い知れない沈黙

イトウ：…私と、エムジーの間の距離を A としよう。
エムジー：えっ？
イトウ：私の気持ちが君に近づく速度は秒速 30cm、逆に君の気持ちがわたしに近づく速度は秒速-30cm だ。今私とエムジーの距離は3m。2人の距離 A が 0 になるのは、何秒後かな？
エムジー：え、だって…0にはなりません。2人が近づく速度はプラスマイナス0cm です。（ホワイトボードに A=300 で直線になったグラフを書く）
イトウ：エムジー、君はまだ子供なんだ。
エムジー：え？
イトウ：（一歩ちかよる）
エムジー：あっ（一歩後ろに下がるが、柱に背中がぶつかってしまった）
イトウ：そう、君はこれ以上後ろに下がれない。だから今君がわたしに近づく速度は、
エムジー：秒速 30cm…
イトウ：君との距離は今 2.7m だ
エムジー：A がゼロになるまで、に、270÷30＝9 で、あと、9秒です（A=300-30t のグラフを書く）
イトウ：それも違う（一歩進む）
エムジー：あっ（下がれない）
イトウ：答えは、あと、3秒だ
エムジー：え…？

イトウ：なぜなら…今から君がわたしに近づいてくる速度は
エムジー：…先生！（自らかけよって抱きつく）
イトウ：マッハ！
エムジー：先生、わたし…先生！
イトウ：（エムジーを引き離して）いいかい、エムジー。これが微分だ
エムジー：え？
イトウ：微分
エムジー：微分？
イトウ：そう。この世界に、本当は等速で直線に流れる運動なんてない。それは子供だましだ。
エムジー：子供…だまし
イトウ：人間の生きる世界は、この地下室のように限られていて無限ではないし、心が近づいていく速度は一定じゃない。つまり、時間を「time」、t とするとわたし達の心の近づく速度の変化は f′(t)で書きあらわされる。こうだ（微分のグラフを書く）
エムジー：え、…待ってください、これじゃ…A はゼロになった後に…ゼロになった後に離れて行くだけじゃないですか！
イトウ：…よく気が付いたね
エムジー：そんな…嫌です。わたし、ゼロでいたい、先生とずっとゼロでいたいんです（ひしと抱きつく）
イトウ：（エムジーを引き離して）エムジー、それは無理だよ
エムジー：先生
イトウ：わたしは、あと3週間ほどで大学に戻らなければいけないし、君たちの夏休みもじきに終わる。
エムジー：そんな…
イトウ：でもねエムジー、微分には永遠があるんだ
エムジー：永遠？
イトウ：そう。わたしは、私たちの距離 A が 0 になったこの瞬間（グラフの A=0 部分を丸して）これを決して忘れない。君だって忘れないだろう。私たちは、ただここから離れていくんじゃない、一度だけ、確かにこの A=0 という永遠の瞬間を通り、離れていくんだ
エムジー：永遠の瞬間
イトウ：そうだ。この0は太陽になって（ゼロの周りに光の筋を書いて太陽マークに）、私と君のその後の人生を照らし続ける。この下っていく曲線は、太陽から降り注ぐ光なんだ
エムジー：光？
イトウ：そう。この光をキャンバスに焼き付けて、私は絵を描くんだ。
エムジー：絵を？
イトウ：君との永遠を、そこに封じ込めて。
エムジー：先生
イトウ：今なら、きっと素晴らしい傑作が描けそうな気がする。降り注ぐ光線、そうだなタイトルは「黄金の午後」だ。この地下室と君に、暖かな午後の日差しを与えよう。
エムジー：だったら、だったらわたしにも永遠をください
イトウ：え？
エムジー：だって、不公平じゃないですか。先生は大学に、キャンパスに戻って、キャンバスに絵を描くことができるけど、わたしにはできません。だから…わたしにも、わたしにも永遠をください！一度だけでいい、A=0を、わたしにくだ

さい…（目を閉じて、なんかキス待ちの顔。口の形が0？）
イトウ：エムジー…。

イトウ、しばらくエムジーの顔を眺めた後、音も無く去り、

イトウ：大人はね、「たった1度が2度3度」、なんだよ。

イトウ、去る

エムジー：先生…。

※詳細な数式は省略しますが、以下のグラフが、役者の手で同じ場所に書かれていきます

A=300
A=300-30t
f(t)を微分した f(t)傾き f′(t)＝放物線、原点 0 を通って登っていき t=3 の時に極大値を取って下っていく

※f(t)は劇中では説明されていませんが、2 人の心の距離が近づく速度（先生の創作）
f′(t)は、f(t)を微分してできる、その速度が加速していく量の変化（加速量の変化）の式

ネリー：この日、この地下室で実際に何があったのかに、確たる証拠はありません。後年になってエムジーの口から語られたこのエピソードは信頼性に乏しく、専門家の間ではあくまで、作品に関する一関係者の証言として、記されるにとどまっています。「黄金の午後」をはじめとする、彼、中期の作品の中にはいつも、ある1人の特徴的な少女がモチーフとしてあらわれ、それはボウマン三姉妹の次女である可能性が極めて高いというのが定説です。

エムジー：ですが、あくまでそれは可能性の一つであり、何が真実であるかはその時代時代の研究者達の勝手な思惑、たとえば論文の発表をなんとかして業績につなげたいといった、芸術的背景とまるで関係のない通俗的事情によって粉飾され、真相は藪の中です。ただわたしに言えるのは、真実は一つだけであるということです。

マギー：しかし、近年それらに異を唱え、新しい学説を唱える学派が現れました。

二人：え？

マギー：作品に描かれた少女の骨格をコンピューターグラフィックを用いて解析した結果、それはむしろ三姉妹の三女、マギーなのではないか、いや、むしろ間違いない、むしろそうであるというのが彼らの主たる主張です。

顔を見合すエムジーとネリー。それを確認して、続けるマギー

マギー：先生が大学に戻られる前の最後の授業の日、二人の姉たちはこの地下室で激しく言い争っていました。

エムジー：どうして、ネリー。信じていたのに、抜け駆けはしないって約束していたのに！
ネリー：わたしだって、信じてたわ、エムジー。エムジーはこっそり先生と逢引するようなわたしみたいな真似だけはしないって。
エムジー：裏切り者
ネリー：そっちこそ

マギーの声：ケホケホ
二人：え？
マギー：…ケホケホ

柱の影から、マギーが出てくる
スカートからパンツをずり下ろして、両足首のとこに引っ掛けて、歩きにくそうにしている
遅れて、イトウも出てくる。ベルト等を慌ててかちゃかちゃさせている
慌ててはいるが、すでに顔に威厳を取り戻している
マギー、悪びれない感じでパンツを引き上げた

エムジー：…そのとき、実際柱の影で何が行われていたのかは、今もわかっていません。

ネリー：ですが、その場にいた人間にはまる分かりでした。

エムジー：先生…、マギー、どうして…
イトウ：わたしのことを好きな気持ち…C だ。
エムジー：そんな、ひどい
ネリー：マギー…
マギー：ケホケホ
エムジー：…先生、わたし、きっと今夜、ベッドで1リットルの涙を流すわ
イトウ：エムジー、そんなに涙を流したら…軽い脱水症状を起こす
エムジー：水差しを置いて寝るわ！
イトウ：こぼしたら大変だ
エムジー：じゃあ、どうしたらいいんですか？
イトウ：エムジー
エムジー：どうして、どうして。わたしには何もくれなかったのに、妹たちには…

ネリー：わたしだって、最後までは…。なんで、なんでマギーなんですか先生！
イトウ：…一番、口が固そうだったから
エムジー：…2つの意味で？
イトウ：勘ぐり過ぎだ
エムジー：あんまりよ。先生にとって、私は小数点以下ですか？切り捨てないで下さい！
ネリー：結局、エムジーの言うとおりだった。1人は3人で割り切れない
エムジー：9が続いて苦しいだけ
イトウ：そんなことはない、
エムジー：だったら、教えてください！1つの幸せを3人で分け合うことはできません。1 人を 3 人で割れば答えは 0.3333…無限に続いて答えは出ない。
イトウ：それは違う、君たちは互いの 3 倍私のことを好きなのだろう？ならばその幸せは 0.99..
エムジー：1 には足りません。永遠に 9 が続いて苦しいだけです。どんなに強く思っても、3 の倍数で 1 人は割り切れない。答えなんか出ないわ！
イトウ：いや、それは違う、もしその思いが永遠に続くなら「1」は「0.99..」と同じなんだ
エムジー：「1」は「0.99..」と同じ…？
イトウ：そうだ。君たちの割り切れない想い 0.99..を a としよう。

a=0.99..
この左右両方を10倍する
10a=9.99..
さらに、左右両方から a を引くとこうだ
10a-a=9.99..-a
そうして、右の a を 0.99..になおすと、
10a-a=9.99..-0.99..
9a=9
a=1
つまり、
0.99..=1
0.99..=1だ！

エムジー：そんな…こんなことって
ネリー：そうか、難しくないわ
エムジー：え？
ネリー：分数よ、0.99..だと永遠に割り切れなくて苦しいけど、3分の1は3倍したら 1 になるじゃない！
エムジー：あっ
イトウ：その通りだネリー。割り切れない想いだって、確かに存在する、1つの愛の形なんだ。
エムジー：愛の形
イトウ：どうやら…これでわたしの授業はすべて終わりのようだ
二人：え？
イトウ：君たちは素晴らしい生徒だった。君たちは、素晴らしい生徒だった。大事なことだから2回言った。

二人：先生
イトウ：さらば、我が愛しい3姉妹たち

イトウ、そそくさと部屋を出て行った

ネリー：そうして先生は風のように、実際は逃げるようにでしたが、去っていきました。ほどなくして、この夏の授業の詳しい内容を知ったわたしたち姉妹の母は激怒し、それが大学へと伝わって、先生は講師の職を追われたと聞いています。先生が単なる手癖の悪い家庭教師ではなく、偉大な芸術家バルタザール・ド・イトウ・ローラだと知ったのは、それからずいぶん時間が経ってからのことでした。

エムジー：あの夏、先生は互いに3倍好きだと主張しあった私たち姉妹の想いを「ゼロ」だとおっしゃいました。しかし、夏が終わり進級してフランス語を習い始めたわたしは、それが間違いだったことに気付きます。先生の生まれたという、愛の国フランスでは、このゼロの形を「ラブ」と読むのです。

※エムジー、台詞の途中で 0 を板書

了